

上三川 激動の中世 ⑫

上三川城主・多功城主のその後

『上三川激動の中世』は今回で最後になります。そこで、廃城後の上三川城主と多功城主について述べたいと思います。

上三川城は、159

7年に真岡城主芳賀高武によって攻められ、城主今泉高光をはじめ、多くの家来たちも自害しました。しかし、子の宗高は家臣に連れられ、高光の弟が住む宇都宮市兵庫塚町に逃げのび、その後、帰農して子孫は現在も兵庫塚町に在住しています。長い年月が過ぎ、当時のできごとも忘れられ、菩提寺である長



多功城主の子孫は四国今治に行った後も墓参りなどで地元との交流を持ち続けました
(写真：見性寺の多功城主多功家累代の墓)

泉寺との関係も途絶えていましたが、明治後期に、偶然発見された文書によって関係が戻り、現在に至っています。

一方、最後の多功城主の多功秀綱は廃城後、長男綱賀、孫の綱任とともに、家臣の家に身を寄せたものの、他家に任官されることなく亡く

なっています。しかし、秀綱の次男綱秀は、廃城後早い段階で江戸に出て、水戸徳川家の家臣の推薦によって、今治藩(現在の愛媛県今治市)主松平定房に取り立てられました。上三川の地を遠く離れ、四国今治に移り住んだ綱秀やその子孫は、祖先の故郷である上三川の地を忘れることはなく、菩提寺の見性寺にたびたび手紙を送り、多功の地に残った家臣たちとも連絡を取り続けました。また、藩主に従い参勤交代で江戸に出府した折には、旧

家臣の代表が江戸まで出て向き親交を深めたほか、藩主の日光社参の折には見性寺へ墓参に訪れ、家来たちの子孫と交流を深めていました。

上三川城と多功城の廃城は、鎌倉時代以来約350年続いた体制の崩壊ということで、地域の構造を大きく変える一大事でした。江戸幕府の下で、新たな体制が築かれていき、上三川は新たな地域へと再編成されていきます。しかしながら、上三川城主や多功城主にみられるように、離れ離れになっても、長い年月にわたり培われた人々の関係は決して失われること無く、絶えることのない絆を保ち続けたほか、それぞれの地域で築かれていた絆も、絶えることはありませんでした。

忘報川柳

岡島秀宝選

白星のねばり助ける徳儀

上蒲生

菅沼マサ

みかんより小振りになった供え餅

上蒲生

柳田智江

万歩計つければすごい千鳥足

石田

柳田政孝

金銀に塗られた花材猫やなぎ

上蒲生

鶴見敏子

その上にまた着て母の背がまるい

石田

大島昇

まっ白な障子へうつる春のかけ

上蒲生

渡辺文子

靴底に笑われている歩きぐせ

上町

上野広江

日向ぼこ私に欲しい広い視野

大町

大八木トク

まだ寒い寒いと着せる親心

石田

柳田キミ子

